

つばさとかける

辻 憲男（文学部教授）

百人一首の阿倍仲麻呂の、
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
は、古今和歌集では、唐の明州から日本に向けて出帆する時の望郷の歌、と伝えられる。若き日に留学生となり、唐の科挙に応じて出世した。名を朝衡と改め、玄宗皇帝に重用されて、帰るに帰れなかった。夢にまで見た故国は、はるか波濤の彼方。友人の王維や李白らが見送りに来た。三十数年前の平城京の、送別の宴の夜を思い出した。ああ、あの時と同じ明月だ…。

羽栗翼（はぐりのつばさ）と翔（かける）の兄弟は立派になっただろう。仲麻呂の従者の子で、長安で生まれ、先年日本に帰った。ともに官途に就き、後に遣唐使にも選ばれた。翼は暦学と医薬に長じた。

この度の大使・藤原清河は、仲麻呂とともにひそかに鑑真に会い、渡航を懇請した。老境の鑑真は喜んだ。過去五度失敗し、失明していた。今度は第二船に乗り、運よく薩摩半島の坊ノ津に上陸した。ところが清河と仲麻呂の乗った第一船は難破し、安南（ベトナム）に漂着した。辛うじて唐に戻った。その清河を迎える使節に翔が加わった。しかし安史（あんし）の乱に遭い、翔は唐に残留した。彼らはずいに日本に帰ることができなかった。

清河の遺児・喜娘（きじょう）は、何としても父の国を見たかった。しかし便乗した船が大破し、舳先につかまって六日間漂流した。ようやく九州天草の長島に漂着したが、口惜しきかな、その後の消息はわかっていない。



奈良春日野は万葉びとの遊樂の地。明州ニンポーは今の浙江省寧波。